

巻頭言

アトランティス学の系譜

会長 渡辺豊和

現在「イワクラ・ハンドブック」編集の最中だが、原稿分量が予定よりもだいぶ越えたので、一章分まるまる割愛した。「アトランティス学の系譜」である。ギリシアの哲学者プラトンは晩年の著書でアトランティスのことを書いている。プラトンの時代よりも九〇〇年前、現代からすれば一五一〇〇年まえに一夜にして海没してしまった大きな島があり、そこでは大変高度な文明が展開され、人々は富み栄えたが、そのため余りに傲慢になり他国を侵略するほどに

なつて、ギリシアを攻め滅ぼそうと押し寄せる。これを怒った海神ポセイドンは島を海没させてしまったというのである。

プラトンが語るアトランティスは夢物語として捉えられていることが多く、彼の生存中ですらそうだった。弟子のアリストテレスは師プラトンの空想と決めつけ問題にしなかつたぐらいだ。キリスト教世界であるヨーロッパでは聖書が絶対真実だったが、聖書の天地創造はたかだかキリスト誕生以前五〇〇〇年にすぎない。ところがソロン（かつてのギリシア偉人ソロンがエジプ

トの神官から聞いた話としてプラトンはアトランティスを書いている）の時代より九〇〇〇年

も前に高度文明を誇ったアトランティスが一日一夜にして海没してしまったといっているのだ。そのソロンすらキリスト誕生前五〇〇年代の人だ。だから聖書よりも四五〇〇年も前に天地創造どころか人類が高度文明を展開し、しかも滅んだというのだ。ヨーロッパの人々にとつて天地創造以前に人間が存在していたこと自体が驚天動地の情報だったわけだ。といつてもプラトンのギリシアはキリスト誕生よりも三〇〇年以上も前の文明であり、この文明様態はルネッサンス以降の知識人には常識であったから彼らには聖書の真実とは違う人類記録が問題だったわけではない。それよりもアメリカ大陸発見とそこに展開されていた未知の文明にふれて、プラト

ンの叙述が一躍真実性をもって迫ってきたのだった。

ジブラルタル海峡の向こう、さらにいえば大西洋の対岸に高度な文明人が存在している、これは大西洋上の失われた文明アトランティスのさらに向こうに大陸があつて、これをアトランティス人が支配していたとおぼしき、叙述がプラトンの著作にあるから、俄然「アトランティス」探求が脚光を浴びることになった。

だが現代人には違った探求目的がある。ダーウインの進化論によつてたつ文明進化の信念を「アトランティス」は否定していることが問題なのだ。BC九五〇〇年以前といえれば歴史学の常識では人類はいまだ石器の初期段階であり、野蛮時代だ。それにそれより古い時代に金属文化を思わせる極めて高度な文明が展開されていたとい

うのであれば歴史学の常識は崩壊してしまう。

歴史学どころか生物学の真理「進化」論だって成立しなくなるかもしれないのだ。

既成の学問体系に依拠する人々には「アトランティス」など空想物語にすぎないし、またそうあつてほしいはずだ。

しかしそうでない人々には「アトランティス」探求は好個の研究行為になる。それでも「アトランティス」の真実を探るには科学的方法によるしか、それを達成する道はないのも一方の真実なのである。

イワクラ研究とここで交わるのである。イワクラはアトランティスと違って失われてはいない。今現に私たちの眼前に厳然として存在する。しかしこれが構築物なのか、自然状態なのか識別できない。勿論「イワクラ学」が対象とする巨石は構築物であ

ることが前提である。それを証明するために様々の科学的検証を必要としている。

「アトランティス」探求も同様の科学的検証が必須の要件なのだ。ところが「アトランティス」探求には恐ろしいほど多数の研究が積み重ねられている。ヨーロッパではここ二〇〇〇年間に二万五〇〇〇もの文献があるというし（ザイドレル『アトランティス大陸』。これぞアトランティス学の系譜なのだが、そのうち現代における代表的なものを選んでいくだけでも、おのずと「イワクラ学」確立の参考となるはずである。

そこでプラトンの原著と以下の四書を紹介している。『アトランティス大陸』（L・ザイドレル）。ザイドレルは天文学者であり、アトランティス海没を大洪水に置き換えている。その大洪水の原因は大隕石が地球に

落下したからであり、落下した場所は北アメリカのカロライナ州だ。BC八四九九年のことであり、これは科学的に証明済みだ。プラトンのアトランティス二著作のうち一書はBC九五〇〇年ではなく、BC八五七〇年を示しているから、この天文学的大事件とアトランティス海没は重なるというわけだ。

ザイドレルは天文学知識を充分に活用して自説を展開しているが、見事なものである。

『アトランティスの謎は解けた』（ゴザール＋「カダト」グループ）。「カダト」はポルトガルの考古学研究グループだ。彼らはプラトンの二著に登場するアトランティス人の名前を言語学的に解析している。それによるとジブラルタル海峡よりの大西洋の島々の言語に近いから、アトランティスのあつた場所は大西洋東側であり、ジブラルタル

海峡に正対していたことになる。またアトランティス人は背丈の高い民族だったこともわかったという。そんなことから背丈が高かったといわれるクロマニヨン人に違いないと自信ありげに言い切っている。ともあれ「カダト」グループは言語学を使ってアトランティスの場所と民族を探っている。

『発行するアトランティス』（渡辺豊和）。プラトンは首都アトランティス・シティを円形とし細部にわたり幾何学図形的に説明している。正多面体をプラトン立体というぐらいである、プラトンにとっては円が立体として認識され球である。私はアトランティス・シティを地球全体とみた。というのもプラトンは他の著作で宇宙、地球、人間＝球形入れ子説も展開しているからだ。

またソロンはエジプトの神官か

らアトランティスのことを聞き、地名人名はすべてギリシア語に直してあると断っている。大西洋は太平洋のことだったし、アトランティス・シテイ図を地球全体として解析していくと、アトランティスは赤道上に位置し、インドネシアのスラウエシ島であることがわかった。こうなるとアトランティスはムーでもある。

スラウエシがアトランティスとわかればここを探ると「アトランティス情報」は得られる。私は建築家としての図形感覚で、それまでとはまるで違うアトランティス像を浮かび上がらせている。

『神々の指紋』（グラハム・ハンコック）。直接アトランティスに触れるのではなく暗示している。ただその暗示が極めて巧妙なのだ。チャールド・ハプグッドが提唱した地殻移動説によつてい

る。蜜柑の皮が実からツルツと滑るように地球の地殻が五〇キロの厚さで滑り、地球の各部分の緯度経度が滅茶苦茶に変動してしまった。アトランティス島とおぼしき場所は南極大陸になり、氷詰となった。

ハプグッドでは知名度が低く信憑性がないと思つたのだろう、この説はアインシュタインの支持を得たとわざわざ大袈裟に断つている。いかにもジャーナリストらしい要領よさだ。

この地殻変動を記録しているのがギザの三大ピラミッドだとしてロバート・ボーヴァルの『オリオン・ミステリー』を活用している。これも他人の説の借用だ。

いずれにしてもアトランティス学には長い歴史があり、学的にも膨大な蓄積がある。とはいえず問としては一つとして認められていくわけではない。すべて

異説なのだ。私たちのイワクラ学も異説であり続けることは覚悟しておかなければならない。しかし異説のほうが通説を遙かに凌駕している場合が多々あり、異説を下敷きにして通説が成立していることも多い。通説とは異説を学習してシャープになるものだ。

了